



グリーンアクセスプロジェクト Phase IV 科研基盤(A)2026～2030年度

環境分野の世代間関係の理論と制度 —世代間関係論の体系化をめざして



大久保 規子

- * 所属：大阪大学大学院法学研究科教授
- * 役割：企画・コーディネート・総括
- * 従来の研究テーマ：環境権、自然の権利、環境公益訴訟
- * 今回の関心：現代社会は長期的思考を要する各種の環境危機に直面しているが、なぜ、どのように将来世代に配慮すべきなのかについては、理論的・制度的課題が山積する。本研究では、将来世代に配慮すべき理論的根拠について、将来世代に権利が認められるかという問題も含めて検討する。また、現在世代が将来世代に与える影響がその行為の性質や対象によって異なることに鑑みて、将来世代に配慮した参加型の政策決定の仕組みや将来世代保護訴訟の可能性について、生物多様性、景観・文化財および高レベル放射性廃棄物の3分野に焦点を当てて考えたい。



井上 真

- *所属：早稲田大学人間科学学術院教授
- *役割：理論班—コモンズ論と世代間関係論
- *従来の研究テーマ：地域の環境・資源の利用・管理制度の実態とあり方をフィールドワークに基づいて検討。その過程でローカルスなコモンズ論から、より広いスケールでの「協治論」（協働型ガバナンス論）へと展開した。
- *今回の関心：インゴルド（2024）は、次世代が先行者にとって代わる「積み上げ」（切断、相続、進歩）ではなく、巻き付いて伸びてゆく「縄」、すなわち次世代は年長者の生と重なり合い生そのものが両者の協働の中で再生するもの（リレー、持続、再生）として世代を捉えている。同時に、人間を世界の頂点（支配）から中心（共存—気遣い、調整）へと回復させるという適切な意味での「人間中心主義」を打ち出している。これらを関係的存在論としての「自然—人間」関係、および世代間衡平を担保する長期持続型コモンズ概念と絡めると何が見えてくるのか？



大塚 直

- * 所属：早稲田大学法学学術院 教授
- * 役割：訴訟
- * 従来の研究テーマ：環境法、不法行為法（民法）
 - ①公害、環境負荷、アスベスト、原発事故、景観利益に関する不法行為法・差止法の検討
 - ②公害、資源循環、廃棄物、気候変動等に関する環境法制の推進、経済的手法の推進
 - ③AIに関する不法行為研究
 - ④環境損害（生態学的損害）、環境と人権のデューデリジェンスに関する研究
- * 今回の関心：④を踏まえつつ、気候変動訴訟に関して、特に民事訴訟において認容に障害となる要件に関して考察する。



高村 ゆかり

- * 所属：東京大学未来ビジョン研究センター教授
- * 役割：国際法の観点から環境権の検討。関連する訴訟におけるコミュニティの権利および自然の権利の相互関係に関する議論を整理・分析
- * 従来の研究テーマ：国際環境条約、国際環境レジームに関する法的問題、気候変動とエネルギーに関する法政策など
- * 今回の関心：
 - 1) 国際法における環境権の理論化
 - ・ 手続的権利（リオ原則10、オーフス条約、エスカズ協定など）、実体的権利
 - ・ 権利主体。コミュニティの権利＝先住人民の権利？
 - 2) 国際的な争訟事例、各国の裁判所の訴訟における国際法上の環境権、コミュニティの権利、自然の権利
 - 3) 気候変動訴訟における国際法上の環境権、コミュニティの権利、自然の権利



伊達 浩憲

- * 所属：龍谷大学経済学部教授
- * 役割：理論班
- * 従来の研究テーマ：潜在能力アプローチを用いた「生態系サービスの享受プロセス」の解明
- * 今回の関心：1930年代以降、経済学は、倫理学との結びつきを断ち切り、一元的な価値（効用）を情報的基礎にしてきた。しかし、近年、アマルティア・センの潜在能力アプローチに見られるように、経済学と倫理学とを結び直すことによって、多様で多元的な価値（観）を扱う包括的な情報的基礎を構築する試みが進められきた。この潜在能力アプローチを拡張することで、「自然に関する多様な価値観」を扱うより包括的な情報的基礎を構築したいと考えている。



寺内 大左

- * 所属：筑波大学人文社会系准教授
- * 役割：コモンズ論の観点から景観・文化財分野の分析し、将来世代への責任が合意形成や制度設計にどのように組み込まれるのかを検討する。
- * 従来の研究テーマ：インドネシア農村地域を対象に、①開発・森林保全政策に対する地域住民の対応を実証的に明らかにし、②地域住民の論理や実践に基づいて政策の在り方を再検討する研究（環境社会学・インドネシア地域研究）。
- * 今回の関心：ボルネオ島中央部の焼畑民を対象に、国立公園、慣習林、村落林、企業開発といった複数の制度的選択肢が併存する状況で、将来世代への責任がどのように認識され、合意形成の中でどのように扱われているのかを明らかにする。



中山 竜一

- * 所属：大阪大学大学院法学研究科教授
- * 役割：法哲学の立場から、世代間正義（=公平）をめぐる各種の理論を整理・分析・検討する。
- * 従来の研究テーマ：リスク社会と法、法と言語
- * 今回の関心：
 - ・ J. ロールズが『正義論』（1971）で提示した「正義に適った貯蓄原理」（the principle of just savings）をひとまずの軸として、それ以前、それ以降に示された、世代間の公平性について論じる様々な理論を整理、分析し、それらに批判的検討を加える。



原 圭史郎

- * 所属：大阪大学大学院工学研究科教授
- * 役割：フューチャー・デザインの知見も活かし、将来世代の利益も考慮した意思決定や合意形成、またこれらを現代の政策立案や行政計画等に反映するための仕組みや方法論を検討する
- * 従来の研究テーマ：フューチャー・デザイン、サステナビリティ・サイエンス
- * 今回の関心：将来世代の利益も考慮した（あるいは世代間利害対立を克服した）持続可能な意思決定や合意形成を実現していくための仕組みや制度、手法の検討とその実践



藤井 紘司

- * 所属：千葉商科大学人間社会学部准教授
- * 役割：環境民俗学の立場から、景観・文化財分野についての世代間関係論を検討する。
- * 従来の研究テーマ：隆起サンゴ礁島の環境史、ひとと生き物の関係史
- * 今回の関心：
 - ① 民俗学における世代間関係論の検討
 - ② 沖縄を対象とした世代間関係の形成プロセスの解明



二見 絵里子

- * 所属：東京経済大学現代法学部准教授
- * 役割：環境法学の観点から、生物多様性分野における世代間関係の論点整理・検討をする
- * 従来の研究テーマ：環境損害に対する責任、生物多様性保全と法、順応的管理
- * 今回の関心：
 - ・ ネイチャーポジティブ。特に、イギリスの生物多様性ネットゲインに関する法制度・事例・訴訟
 - ・ 生物多様性について、環境損害に対する責任



松本 和彦

- * 所属：大阪大学高等司法研究科教授
- * 役割：環境権及び民主主義についての憲法学の観点から整理・分析
- * 従来の研究テーマ：環境リスクマネジメントの研究、実体的・手続的環境権の成立可能性、環境保全と民主主義のあり方
- * 今回の関心：
 - ・ 長期的展望を備えた民主主義の成立可能性
 - ・ 環境権及び自然の権利という視点からの権利論の再検討
 - ・ 憲法と将来保障の関係



山下 英俊

* 所属：一橋大学大学院経済学研究科准教授

* 役割：分野班

高レベル放射性廃棄物 経済学的論点×合意形成

* 従来の研究テーマ：環境・資源経済学（エネルギーと地域との関係）

* 関連業績：

- ・ 山下英俊（2015）「『ファウスト的取引』再考」『経済志林』82（1・2）、145-163頁
- ・ モニカ・ベーム（山下訳）（2017）「ゴアレーベンの高レベル核廃棄物と合意形成」『行政法研究』18（18）、131-148頁
- ・ 山下英俊・渡辺重夫・西林勝吾（2021）「放射性廃棄物管理に失敗した処分場の原状回復問題:ドイツ・アッセII鉱山」『環境と公害』51（2）、52-55頁
- ・ 山下英俊（2026）「文献調査が地域に与えた影響：寿都町町民アンケートの結果から」『環境と公害』55（3）、67-70頁



渡辺 理和

- * 所属：甲南大学他 非常勤講師
- * 役割：理論的研究（環境倫理学からのアプローチ）
- * 従来の研究テーマ：
 - ・ 環境倫理および動物倫理における自然の権利の展開とその規範的枠組み
 - ・ 環境倫理に基礎づけられた環境教育研究
- * 今回の関心：
 - ・ 自然の権利論では、人間中心主義から生態系中心主義へのパラダイムシフトや、倫理的共同体における平等を生態系へと拡張する倫理拡張主義をベースに、その規範的枠組みについて検討してきた。
 - ・ 世代間倫理の規範的枠組みについて、未来倫理学（ハンス・ヨナス、カール＝オットー・アーペル）、効果的利他主義（ピーター・シンガーら）、長期主義（ウィリアム・マッカスキル）などの立場について考察する。



研究協力者

- * 国立政治大学地政学部助理教授 李 明芝
- * 弁護士（ブラジル） チアゴ・トレンチネラ
- * 公益財団法人公害地域再生センター研究員 谷内 久美子
- * 大阪大学大学院法学研究科博士後期課程 松竹 夏鈴
- * 大阪大学大学院法学研究科助教／URA 山田 綾子